

令和7年(2025年)第1回熊本博物館協議会議事録

令和7年(2025年)10月29日(水)

濱洲 副館長	それでは皆様、定刻となりましたので、これより令和7年度第1回熊本博物館協議会を開会します。皆様改めまして、おはようございます。
委員	おはようございます。
濱洲 副館長	本日はお忙しい中お集まりいただきまして本当にありがとうございます。私は進行を務めさせていただきます、副館長の濱洲と申します。よろしくお願いいたします。それでは資料1の表紙の式次第に沿って進めさせていただきます。本日は出席者が過半数を超えておりますので、この会議は成立しております。まず初めに、熊本市教育委員会事務局教育総務部長の中川より、皆様にご挨拶申し上げます。
中川 教育総務部長	皆さん改めましておはようございます。ただいまご紹介いただきました教育総務部長をしております中川と申します。本年度第1回の博物館協議会の開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。本日はご多用の中ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。皆様方には先だって熊本博物館協議会委員として委嘱をさせていただいたところでございますが、今回は大幅な委員の改選となりまして10名の方を新たにお迎えすることができたところでございます。再任の方も含めまして、ご就任を快くお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。任期は令和9年7月までとなっておりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。本日の協議会の内容は、令和6年度の事業報告と事業点検評価を主な議題としております。また、今年度より熊本博物館の運営方針の見直しに着手をさせていただく予定でございます。詳しくは後程事務局の方からご説明を申し上げたいと存じます。委員各位におかれましては、これまでのご経験やご見識を踏まえ、それぞれのお立場から博物館の運営に関しまして、貴重なご意見を賜りますことができましたら、大変幸いに存じます。どうか忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。最後になりますが、委員各位には公私ともご多忙な中、貴重なお時間をいただき、重ねて御礼を申し上げまして、簡単ではござい

<p>濱洲 副館長</p>	<p>ますがご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>次に次第 3、委嘱状交付並びに委員紹介に移ります。資料 1 の 2 ページ 3 ページをご覧くださいまして、7 月 24 日に開催されました定例教育委員会会議において、皆様を本協議会の委員として委嘱する議案が可決されております。委嘱状の交付ですが時間の使い方を考え机上配付をもってかえさせていただきます。また各委員の紹介について、書面の記載内容をもってご確認いただきますようよろしくお願いいたします。任期は 2 年、令和 9 年 7 月 31 日まで、どうぞよろしくお願いいたします。ここで 1 点、委員の件で皆様にお伝えいたします。委員総数が 14 人となっておりますが、7 月の委員決定の時点では、家庭教育の委員として熊本市 P T A 協議会の常任理事である清田晃子氏を選任しました。その後清田氏は、熊本市の教育委員として着任することとなりましたことから本協議会の委員については 9 月 30 日付で辞任届を受受理し、承認しております。現時点では家庭教育の分野の委員が不在となっておりますので、P T A 協議会を通じ後任の委員の選任を依頼しております。それでは次第 4、会長、副会長選出に移ります。選出は委員の互選となっておりますが、どなたかいらっしゃいませんか。</p> <p>(鈴木委員挙手)</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>はい、お願いします。</p>
<p>鈴木委員</p>	<p>今回大幅な委員の改選がございまして、そして今後館の運営方針の見直しですとか、重要な方針を検討する機会になりますので、これまでの経緯をよく踏まえておられるということや、これまでの手腕を拝見してきましたので、前回の会長でいらっしゃる松下委員を推薦させていただけたらと思いますけれども、ご審議いただければと思います。</p>
<p>濱洲 副館長 委員</p>	<p>ただいま鈴木委員よりご発言がございましたけれども、皆様、いかがでしょうか。</p> <p>異議なし</p>

濱洲 副館長	はい。それでは本協議会の会長について、松下委員にお願いしたいと思います。
松下委員	はい。
濱洲 副館長	次に副会長について選出に移ります。どなたかいらっしゃいませんか。
松下委員	何かお返しをするようですけど、今まで通り鈴木委員にお願いしたいと思います、よろしくお願いします。
濱洲副館長	松下委員よりご発言ございましたが、皆様いかがでしょうか。
委員	異議なし
濱洲 副館長	はい。それでは副会長に鈴木委員にご着任いただくことをよろしくお願いいたします。それでは二方、前の席に移っていただけますでしょうか。  (移動)
濱洲 副館長	それでは松下会長より一言ご挨拶をお願いいたします。
松下 会長	松下と申します。よろしくお願いいたします。普段はこの肩書、割と近くの島田美術館に非常勤で行っております。よければお足をお運びいただきたいと思います。こちらの博物館の会長としては、2期目ですかね。先ほどこれまでの経緯を知っているからとは言われましたけども、今回かなり変わってしまして、新任の方も多、委員の数も増えた。それから、事前に配られたそれも随分読むところが多くて、なかなか皆さん大変だったんじゃないかなと思います。という私の感想を述べておきまして、博物館は熊本には県立の総合博物館がありませんので、ネットワークセンターでその代わりと言ってはなんですけどもこの熊本市博物館が、県内でも総合博物館としては唯一と言ってもいいのでしょうか。いろいろされておられますので、その館長の諮問機関、或いは館

	<p>長に物申す機関として、この会が活動できればと思っております。活発なご議論をよろしく願いいたします。とはいえ、時間に制約があると思いますがよろしく願いいたします。</p>
濱洲 副会長	<p>ありがとうございます。鈴木副会長より、ご挨拶をお願いいたします。</p>
鈴木 副会長	<p>熊本大学文学部で専門は民俗学ですが、最近、現代文化資源学という名前のコースで漫画やアニメやゲームをどういうふうに地域振興に活用するかということをやらせていただいております。会長の補佐役として大変微力ではございますけれども、どうぞよろしく願いいたします。</p>
濱洲 副館長	<p>ありがとうございました。それでは次に次第5、事務局説明に移ります。次の次第6議事が今回のメインとなりますので、その前段の説明となります。委員の皆様には事前に資料をお届けしておりますが、傍聴の方もお見えですし、先ほど会長からもありました通り、だいぶ取り扱いの変更したところもございますので、改めて説明をします。その後、まとまった時間でご議論いただければと思っております。ここから着座にて失礼いたします。それでは資料の1をご準備いただきまして4ページをご覧ください。この協議会の位置付けですけれども、先ほど会長からもありました通り、関係法令の規定では、館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関です。おめくりいただきまして6ページをご覧ください。今回、特に皆様にご意見いただきたい点をお伝えします。中程の表にあります通り、平成30年度にリニューアルオープンした際、運営方針を定めておりますが、その後法改正があり、また、運営を進めていく中で、様々な課題が見えて参りましたのでこの運営方針の見直しに係るご意見をいただきたいと考えております。これから2年間にわたるご審議よろしく願いいたします。次の7ページに今後のスケジュールをお示しております。一番下のイメージ図が見やすいかと思っておりますけれども、この協議会でいただいたご意見の他、下の緑の矢印が見えると思っておりますが、これから実施しようと考えております各種アンケートや当館は教育委員会に属する組織ですので、教育委員会会議における教育委員の意見、それから市議会からの意</p>

見などを踏まえ、令和9年度に確定したいと考えています。それでは次に、議事にかかる資料2をご覧ください。前年度事業及び内部評価に対する意見です。資料をおめくりいただきまして2ページから3ページをご覧ください。当館の沿革です。今年で誕生74年、この土地に移転しましてから48年目となります。3ページの一番下ですが、合わせて10分野の事業を行う総合博物館です。おめくりいただきまして次の4ページは現在の運営方針の基本理念としまして、広域情報型、市民解放型、郷土立脚型、人間密着型の4つを掲げ日々運営を進めております。5ページから令和6年度の事業概要についてです。おめくりいただきまして6ページ7ページは天文を除きますそれぞれの分野における調査研究活動について、目標、主な取り組み課題などについて整理しております。内容を見ていただきますと、それぞれの分野でテーマを設定し、県内や県外に調査に出かけるなどし、調査研究活動を進めております。今日も2人の学芸員は県外に調査に出ており、もう1名は県主催の行事に参加しております。詳細については記載の通りです。次に8ページをおめくりいただきまして、資料の収集保存についてまとめたものです。まず登録済みの収蔵資料件数は、昨年度末現在で15万4293点です。下の表に年度推移をつけておりますが、ご覧の通り増加傾向にあります。この点、収蔵庫には限りがありますので、下段の表の中段を見ていただきますと、主な取り組みの1つ目に書いておりますが、まずは各分野で収集と整理方針を作成しています。これに基づきこれまで未整理だった資料を再整理する他、収蔵方法を改めるなどした結果、収蔵点数は増加しておりますが本館の収蔵庫の容量が逼迫している状況にはないということをお伝えしておきます。次におめくりいただきまして10ページと11ページですが、令和6年度の入場者数です。トータル9万9824人、令和5年度との比較では約1割減という結果です。これは10ページ、一番下段の参考の2、黄色がけしている表をご覧くださいと、総入場者数は有料展覧会であります特別展観覧者に左右される傾向があります。令和4年度以降コロナ禍明けで10万人前後を推移しております。見開きの11ページは入場者のうち、プラネタリウムの観覧者数です。トータル5万3188人、令和5年度との比較で22%の増となりました。これも、一番下の参考2を見ていただきますと、令和6年度の実績はリニューアル後初めて5万人を超えています。入

場者の概ね半数はプラネタリウムを見ているという状況です。おめくりいただきまして 12 ページは財務にかかる資料です。令和 6 年度決算としまして①2 億 7000 万円余の支出に対しまして②の収入は 3300 万円余。差し引いた約 2 億 4000 万円は税金で賄われているということになります。次に 13 ページからは、当館の主要 5 事業について説明をいたします。14 ページですが、特別展及び企画展等と書いてありますが、いわゆる展覧会の実施状況です。(1) の特別展は、入場料に加えて別途観覧料をいただく展覧会で、基本的に年 1 回、時期については多くの誘客を意識し夏休みに実施をしています。令和 6 年度は植物分野の展覧会を民放のテレビ局と実行委員会形式で実施しました。また (2) の企画展、(3) の共催展では、保存科学、美術工芸、民俗及び考古分野の展覧会を開催し、(1) とあわせ春夏秋冬、年間を通じ、また、分野のバランスを図り実施しました。15 ページをご覧ください。ここで 1 点、今年度の協議会から資料や進め方を変更した点について説明をします。まず、このページ以降、最初の部分に館としての総合評価を A から D に分けてつけています。よってこの展覧会については、担当の個別の評価などを踏まえ、B：概ね実施できたとしています。昨年度までは、担当の評価のみ掲載しておりました。また、皆様のご意見を事前にいただきまして、見える化し、改善を図っております。この点、ご協力本当にありがとうございました。そして 15 ページの下ほどの部分、今空欄となっておりますが、皆様から総合的な評価をいただきたいと、このように考えております。以上が変更点の説明ですが、委員の皆様からは、評価の拠り所となる成果指標の設定が必要ではないかといった趣旨のご意見をいただいております。ご指摘の通り、現時点では施策体系に応じた成果指標を設定しておらず、各年度の予算編成の段階などで個別に振り返りを行っているような状況ですので、今後の見直しの中で設定していくことを念頭に置いて進めて参ります。戻りまして特別展、企画展の評価ですが総合評価を B とし、15 ページ以降、皆様からいただいた意見を掲載しております。また別に配布しております、小畑委員と岩崎委員の意見もご覧ください。20 ページまで進んでいただきましてプラネタリウムの実施状況です。①の年間投映にあります通り、令和 6 年度は展覧会同様、春夏秋冬メインとなる番組を変え、夏にはアニメ物を取り入れるなどしています。また②のその他の投映にあり

ます通り、ターゲットを絞ったり、他の分野と連携を図った投映などを織り交ぜるなどといった取り組みもしております。21 ページですが、館としての評価は分野の中で唯一学芸員が未配置である点などを課題としまして、Bとしております。24 ページまでおめくりいただきまして、3 の教育普及活動は、主に館内で行う講座に関する事業をまとめたものです。すべて継続事業ですが、委員のご意見にもあります通り、自然科学系寄りの事業が多いのが特徴です。対象は親子の他、年配の方まで幅広い方々のニーズにこたえ実施しています。(2) のこども科学ものづくり教室のうち「触れて作って、半導体がここにもあるよ」につきましては、令和 6 年度の新たな取り組みとして熊本大学と連携して実施した教室です。こうした最近の社会の動きも意識しながら進めております。25 ページ、このような状況を総合的に判断しまして評価を B としました。次に 30 ページまでおめくりいただきまして、4 項目ですが教育普及活動のうち博学連携事業と呼んでいる事業です。主な内容としましては、(1) や (3) は館外において、学校関係者や一般の方向けの学習活動支援を行っています。また (2) (3) (5) は、館内における事業ですが、特に (5) では将来学芸員を目指す 13 人の大学生に対し、約 1 週間当館で実習を実施し、未来の人材育成確保に繋がる取り組みにも力を入れたところです。31 ページ、館としての評価は人的な制約がある中、幅広い対象に実施できたとして、B としました。36 ページまでおめくりください。5 番目の情報公開についてです。ホームページや SNS など、インターネットを活用した情報発信の他、紙媒体による広報を継続して実施しています。37 ページの評価としては、博物館行政に限らず、国全体のデジタル化の推進にどこまで対応していくかを課題として残しており B としております。41 ページ目までおめくりいただきまして、南区城南町にあります塚原歴史民俗資料館についてのご報告です。42 ページ、沿革ですが場所は高速道路が上を通ります、塚原古墳群に隣接しており、開館し 42 年がたとうとしております。考古、歴史、民俗分野を扱う資料館です。最後の 43 ページをご覧ください。年間入館者数は昨年度の実績で 4523 人です。コロナ禍明け順調に回復しています。次のページの (4) の展示をご覧ください。企画展の 2 つ目、夏休みに実施した「世界の昆虫展」では、当館の標本展示とあわせて生体展示もあわせて行ったことから、多くの入場者でにぎわいを見

せています。資料2は以上です。次に資料3をお手元にお願ひします。今後の運営方針見直しを見据えた現状と課題についてご説明をいたします。主な項目として5点挙げておりますが、まず1点目は、運営の検証と評価のあり方についてです。資料は2ページと3ページをご覧ください。成果指標については、先ほど説明しました通りですが、その前段として、中段、課題のAに書いております通り、正確にニーズを把握しきれておりません。3ページの来館者統計をご覧ください。今ある統計では、例えばですけども、外国人観光客対応を考える際にあっても、委員のご指摘にもあります通り、外国人の入場者数を正確に把握しておりません。成果指標に関連してですが、一番下をご覧くださいますと、本市の最上位計画である第8次総合計画においては、令和13年度における来館者数を12万5000人と設定しています。めくっていただきまして5ページは観光振興への寄与です。6ページの上段に今の運営方針には、ご覧のような記載があります。熊本城域にあるという地の利を生かしまして、観光客の誘致を図りたいところです。中段の課題の部分ですけども、観光部局が積極的に観光戦略を進める一方で、(2)の数字が示す通り、当館までなかなか行き着かないということ、また(3)にあります通り、交通手段の課題も抱えているところです。おめくりいただきまして次の9ページ以降ですが、博物館法改正への対応についてです。10ページ、11ページと見開きにしておりますけれども11ページがこの法改正の主な項目を列挙しております。この中で国の所管省庁であります文化庁が強調しているのは、3番目の博物館事業のデジタルアーカイブの作成と公開について、また4番目の博物館の連携、そしてそのあとですけども、博物館が教育、まちづくり、観光、福祉といった様々な分野の主体と連携することによって、博物館が地域で多様な価値を発揮することを促すこと、これが実務に直結している部分として我々も受けとめております。おめくりいただきまして12ページは施設・設備の充実です。当館、平成30年度にリニューアルを図っておりますが、その後のコロナ禍を経て、世の中が急速に変化をしています。中段の課題に掲げております通り、展示の多言語化、プラネタリウム設備の更新、入館予約システム導入の検討など、お客様満足度を最大化するサービスの検討が必要だと見通しております。最後の14ページ15ページが、一連の課題解決に向けては一定の財源が必要となりま

<p>松下 会長</p>	<p>すことから、これを安定的に確保できる手法や多額の資金を要するものへの対応策の検討など、事業見直しと同時並行で進めて参りたいと、このように考えております。長くなりましたが、説明を終わります。これからの議事は、会長に進行をよろしくお願いいたします。</p> <p>はい。盛りだくさんの内容についていっていますか。これまでにこれだけの分量の資料はなかったんですけども大変だなという感じがしております。要は総合評価、これ後で、皆さんでA B C D決めたいと思います。そのつもりでよろしく願います。それぞれ館からの内部評価が入っております。そのうち14ページ以降の5つの主要施策について我々協議会に評価を求められているということですね。ただ、6、7ページが一応調査研究活動を、そして8ページの資料、収集保存というあたりが、博物館事業の根幹になる部分であろうかと思っております。それぞれに評価を書いてあるのですけれども、この部分からまずご意見をいただきたいなと思っております。この部分については、学識者の方から何かご意見いただけたらいいのかなと思っております。協議会委員も今回、少し増えておりますし、入れ替えもあっております。お手元にこの名簿一覧がありますが、学識者という部分では6人の方がおられます。年代もいろいろありますし、若い高校1年生も参加いただいております。後でご意見があればと思います。ということで、一応この14ページからの主要事業の評価というところで、それぞれ各事前に委員の方からご意見を伺ってはおります。特にそれぞれにということになりますか、まず1番の特別展および企画展等の開催ということで、ご意見を求めたいと思います。そして評価はですね、もう最後に5つの項目をまとめて振り返っていただくと、それぞれに評価をいただくということにしたいと思っております。特別展及び企画展等について何かご覧になったり、或いは体験されたりしたことをご意見がある方は、挙手をお願いいたします。ここに書いてあることとダブっても全然構いませんので。特別展、企画展ご覧になった方おられますか。例えば「旅するタネ」、夏場の夏休み中の集客が今回少なかったんですよ、前年よりも。</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>はい。令和6年度の特別展に関してはその前年度よりは少なかった</p>

	たという結果になっております。
松下 会長	前年度は何だったですかね。
的場 館長	透明標本展です。
松下 会長	透明標本展。去年は「旅するタネ」ということですね。高宮委員、いかがでしょうか。
高宮 委員	拝見したんですけども、非常によく企画されていて、このテーマがですね、随分絞られていたテーマだったんで、最初どういことが展示されているのかと思って見てきたんですけども、本当に子供たちがわかりやすいように工夫されていたし、身近なもの、家庭の生活にくつつくような展示があったのが、持続的なものになるんじゃないかと思ってよかったなと感じました。
松下 会長	はい。他にどなたか。
岩崎 委員	現代美術館の岩崎です。お願いいたします。私も「旅するタネ」展、拝見いたしまして、大人もすごく楽しめる展覧会でした。すごいタネっていろんな形とか大きさとかがあって、要は、私たちが食べているものとかにもタネって、よくあります。タネ自体を食べるとかいうこともありますよね。なんかそういうことも含めて、身近に本当にその辺に生えているもの、あるタネとか、そこから育つ植物とかっていうところにすごく想像を追い足すような展示で、すごく面白いなと思いながら見ました。見せていただくと結構限られた予算の中でされているんだと思うんですけども、ここ数年はテレビ局さんと実行委員会を組んだりとか、いろんな工夫をされながら、展示をされているということで、すごく面白い展示だったなというふうに思います。2ヶ月ぐらいですけども、1万6000人の方がおいでになったということで、すごく頑張られたんじゃないかなというふうに思っています。やっぱり博物館とかって展覧会の中身はなかなか評価されなくて、人数だけで見られるっていうことがすごく多いと思うんですけども、その1つ1つがどれだけ人の心に影響を及ぼすかとか、教育機関ってもちろん教育委員会の施設でもありますので、

	<p>そこのところをしっかりと評価していくことが必要なのではないかなど。人数だけで図られるのはうちもそうなのでなかなか苦しいんですけども。そうじゃない評価をしていただければなというふうに感じました。以上です。</p>
松下 会長	<p>はい。人数だけではないと。</p>
岩崎 委員	<p>はい、言って欲しいです。</p>
松下 会長	<p>どうしてもね、そっちに引っ張られるところもありますので、私も見たんですけど面白くできているなと思って、大事なことだなと思いつながり見たところでありました。次の特別展で、「刀」、「資料保存の世界」がその前年からの企画展として、これはどなたか何か。見られた方で。</p>
池上 委員	<p>この企画展、たしか前回の協議会のときに見学させていただいたかと思います。まず、この企画展を年間3回、3件実施されていますけど、予算はこの12ページの表でいくと、特別展開催経費に含まれていますか。</p>
濱洲 副館長	<p>はい。おっしゃる通り、この12ページでいきますと①の3の中にこの特別展企画展等経費が含まれております。</p>
池上 委員	<p>ありがとうございます。この「資料保存の世界」すごく私たちも勉強になりますし、初めて知ることがたくさんあって、面白い展示だなというふうに拝見させていただきましたが、この期間、何人ぐらいの方がご覧になったかとか、なかなか把握が難しいと思いますが、これ特別展と企画展をこう切り分けて発信してらっしゃるのは何か意図があるのでしょうか。例えば、少し工夫して夏の特別展と同じような扱いで発信していくとか、企画展と特別展のバランスというか、それをどういった感じでされているのかなど。特別展を1回と企画展を3回という組み立てをどんな視点でされているのか。</p>
的場 館長	<p>基本的な考え方はですね、夏の特別展は夏休み期間中に行うものですね。これに関しては特に親子連れあたりをターゲットにし</p>

	<p>て、たくさん来ていただけるようなものを主眼としておりまして、企画展は学芸員が研究活動を行っておりますので、その調査研究活動の成果の場としての位置付けで分けております。広報発信に関しては、特別展は地元のテレビ局や新聞社とタイアップしながら、実行委員会を組んで広報戦略を立てていきますので、その関係で特別展の方が広報力が高い、皆様の新聞やテレビなどで情報として入ってきやすいという面がございます。</p>
松下 会長	<p>展示のパッケージみたいなものが特別展ですね、それに熊本のものを少し加えるというようなものが特別展ですね。</p>
的場 館長	<p>そうですね。6年度の「旅するタネ」という特別展は巡回展ではなく当館の学芸員オリジナル、他の参考にした館はございますけれども、パッケージいわゆる巡回展ではなく、当館のオリジナルでございます。そういった意味で先ほど岩崎委員からも、中身を評価して欲しいといった意見がありましたけど大変ありがたく思っております。</p>
松下 会長	<p>そうですね。資料保存も面白かったですよね。</p>
的場 館長	<p>ありがとうございます。</p>
松下 会長	<p>今までにないものを作っておられるなという感じがありました。あとは私がいる島田美術館の関係ではその次の刀剣ですね、同田貫あたりを中心にした4館合同で連携してやったということ。はい。1番についてはそういうことで。</p>
濱洲 副館長	<p>池上委員の質問に補足ですけれども、完全に特別展1回、企画展3回と決めているわけではありません。特に今年は、こちらの「八雲とセツ」、夏は「遊び絵展」という特別展もやりましたし、こちらも有料展覧会ですので、今年は2回やります。そういったものは観光部局とか、文化財部局とかとの連携とかもありますので、その時その時に変えていくということもありますし、最初に触れていただきました通り、予算の制約ですとか、人的な対応の制約もありますので、そこで対応を少しずつ変えていくといった状況でございます。</p>

池上 委員	学芸員の人数に対して企画が多く大変だなと感じました。
松下 会長	「八雲とセツ」というのは企画展？
濱洲 副館長	特別展。有料展覧会です。
松下 会長	これはもうこちらの学芸の方が進められた。
濱洲 副館長	はい。おおむね進めている状況です。ただ単体ではなくて民間の皆様と実行委員会形式でやるということですね。たださっきおっしゃいました通り、商品をどっかから買うとかいうことではなくって、自前で仕事すると。ですので、有料展覧会は全部どこかから買って展示するというわけでもないということです。
松下 会長	次は、第2項のプラネタリウム、20 ページ。いろいろ、これがこの館の稼ぎ頭と言ってもいいのでしょうか。頑張っておられるなと思いますが、何かご意見があれば学識の方じゃなくても、プラネタリウムで思われることがあれば。
小畑 委員	小畑と申します。よろしく申し上げます。考古をやっています。今委員長がおっしゃったように、資料を見せていただくと入館者の半分、他の観光施設の熊本城との関係では熊本城が 130 万人ぐらい。その 10 分の 1 が入館者。その半分以上を占めているというのは大きいと思うんですけど、その時に問題が2つあるのは、入館者の細かい動向を把握されていないっていうところに、戦略を練る上で基礎的な情報が欠落しているっていう部分があります。例えば館の入館者とプラネタリウムの入館者の資料があるんですけど、資料によって区分が違うんですね。どういう親子連れが来ているのか、どういう人たちが来ているのかをもう少ししっかり把握できるような統計をとっていただきたいというのがひとつ、それをベースに今のような企画を考えていただきたい。それから、館の懸念事項としても指摘されていましたが、やっぱり専門学芸員がないというのは、一番強みのところに、一番大事な方がいないっていうのは、やはりこれは非常に弱い、ウィークポイントになると思いますし、これから発展させていけないで

	<p>すね。岩崎委員からもありましたけども、やはり数で評価しているところでこれが一番目立つところなので、私はその数で評価するというのは私も反対なんですけども、そういう意味では、やっぱり専門の方を入れるという努力をしていただいて、当面の策として、例えば人材がいるかどうかはわからないんですけども、そういうところをリタイアされた方を臨時的でも雇うとかすれば、経費的に安く抑えられるとかです。本当は専門の方を置いていただくのがいいんですけど、そういうことも考えていただければと思います。統計の取り方、それから学芸員の確保です。この2点。</p>
<p>的場 館長</p>	<p>専門の学芸員の不在につきましてご説明します。天文の学芸員は令和5年度の年度途中で退職により欠員となりました。令和6年度、それから今年度ですけれども、本市の人事委員会が一括して採用する新規採用職員の中で募集をしましたが採用試験の結果、不採用となり、不在のままになっているというような状況です。引き続き学芸員、専門の分野の採用につきましては、積極的に募集を行いまして、人材の確保に努めてまいろうと思っております。皆様には大変ご心配をおかけしますが、何卒、この分に関しましてはご理解いただければと思います。それからもう1点その統計のお話です。これからその館の運営をどうしていくのかというときにやっぱり、そのベースになるようなデータがないんじゃないかと、おっしゃる通りでございます。資料3の10ページ11ページに少し統計の表が出ておりますけれども、例えば未就学や小学生の数はどこから拾っているかと申し上げますと、チケットの販売区分からの統計です。ただおっしゃる通り、これは、いわゆる質的な評価がしやすいような統計には至ってない。我々も課題として認識しておりまして、当館の現状と課題という資料3の方に盛り込ませていただいているというようなところです。我々もこれは非常にしっかり把握していかなければならない課題だというふうには認識しております。</p>
<p>坂本 委員</p>	<p>プラネタリウムについて、その他のところの意見に書いていたと思うんですけど、市立博物館なので、市立の小学校とか高校です。小中学校、高校の正規の職員の方ってなかなか時間取れないでしょうから非常勤で今、理科専門とか雇われてますよね。そう</p>

	<p>いう方の中に、天文がすごい好きな方をばらばらと存じ上げているので、その方たちを非常勤でしたら時間給なので、費用も抑えられるし、とても熱心な方たちなので、そういう方に移行措置として来ていただいてアドバイスをいただくとか、企画の話とかいろいろ一緒にやっていたらいいんじゃないかなと思います。教員を目指してなかなか受からなくてもずっと天文に情熱を燃やしてらっしゃる方たちいらっしゃるので、その方たちはいかがでしょうか。</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>ありがとうございます。坂本委員には 22 ページの一番上の②にも書いていただいているところでありまして、さらに先ほど小畑委員からもご意見いただいた通りです。やはり一番の当面の策としては、こういったものが現実的かなと思います。私ども教育委員会に属している組織ですので、中学校以上で地学を教え始めるということもありますが、市立の高校ですと今は必由館高校と千原台高校がありますが、地学の教員がおりません。ですので、今後は例えば県内に広げるとか、大学の先生にお声掛けするとか、そういった努力は、今からでもできることかなと思っております。</p>
<p>坂本 委員</p>	<p>私が主催して、天体観測とか設定して観察会をするときは、今、小学校で非常勤を理科でやっている方とか、県民天文台の方がボランティアで来てくださって実施するんですね。そういう方たちは、お声掛けしたら喜ばれる、喜んで参加されると思います。</p>
<p>小畑 委員</p>	<p>今度正式な人材を取るときに人がこないっていうことの 1 つの解決策として、これは全般にいえるんですけども、先ほど企画展のベースに学芸員の研究活動、調査活動が基礎になっていると。企画をやられていることは非常にいいんですけども、先ほどの予算の問題も含めて、ここにもちょっと書いてあるんですけども、科研費や他の別予算を導入して、館の運営をもう少し手厚くするところが私は研究とかその成果が博物館の命だと思ってるんですね。一番インプットするところ。なのでアウトプットするときにそれがないと、本当に他のことにまで全部影響を与えてしまう。何が言いたいかという募集されるとき、こられる方も研究環境っていうものがあれば、こられる可能性が上がるので、組織</p>

	<p>の中での研究の時間とか学芸員の時間とかの見直しとか予算の手当、こういったものは先ほど言った外部資源を利用することが可能ですので、その研究面を活動として今から重視していく、そういったことができる博物館であるということであれば、人も集まりやすいんじゃないかなと思いますのでちょっと一考願えないかと思います。</p>
松下 会長	<p>はい。せっかく必由館の名前が出たのでどうですか。若い視点で見て、プラネタリウムは体験されました？</p>
星牟禮 委員	<p>はい、1回見ました。</p>
松下 会長	<p>なんかこうすればいいのにとか、何かありますか。理系ですか？</p>
星牟禮 委員	<p>文系です。</p>
松下 会長	<p>文系ですか。大丈夫ですか。</p>
星牟禮 委員	<p>はい。</p>
松下 会長	<p>すみません、急に振りました。それでは次は、この3番の教育普及活動、24ページに行きたいと思います。教育普及活動も1つの任務としてありますけれども、これに対して何かご意見があればと思います。小原委員からいろいろ出ていますけど、これから、先のことでしょうか。28ページあたりには、事務局からの回答もでておりますけども。</p>
小原 委員	<p>私、今年令和7年の9月に社会教育士の方を取得いたしまして、現時点の博物館の中でも、特に先ほどおっしゃっていただいた入館者の教育活動という部分に力を入れなきゃいけないという意見が出ております。主に私として考えていたのが、未来のことなのでちょっと改めて見直してみたいんですけども、こども科学ものづくり教室について、他業務の影響が出ているんじゃないかと考えています。サービス品質を維持するためにも講座の開催数を適正化するのがまず必要だと思います。そのために、事業は手でやられていることが多いので、そういった準備の一部を外部委託</p>

	<p>とか、デジタル化する検討を進めて、学芸員がその教育研究に専念できる環境を整えるべきではないかと私は考えています。これから社会教育士でも、こういう教育活動普及っていうのは、美術館を含め、様々な部分で協働していかなくてはいけないというところがございます。なので、私が最終的に考えていますのは、人づくり、繋がりづくりそして地域づくり、この3つの観点で教育をしていく、そういうことを考えております。以上です。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>はい。事務局から何かありますか。今の小原委員、これはもうご意見になると思います。</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>これは全分野に関係していることかと思えますけれども。よく言う人、モノ、金といった問題があるということが、まず出発点で先ほどのプラネタリウムもそうですし、学芸員についてもいろんな業務を抱えているわけです。博物館単体でいろんなことをやろうとしてもなかなかうまくいかないでしょうから、1つ1つ優先順位をつけて、課題解決に向けていくということが必要ではないかというのが基本だとは思いますが、これこそこれから考えていく運営方針の中で、先ほど小原委員の方から、回数をどうするかという話もありましたけれども、その適正回数の部分とか、人数だけではかされる部分ではない質の問題、お客様の満足度の問題とかもありますので、そういったことを考えていきながら見直していくのかなと、このように見通しています。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>はい。</p>
<p>池上 委員</p>	<p>海外の博物館の例を申し上げますと、資料を中心とした研究を行う学芸員の仕事と、こういった教育普及を行う専門の職員が完全に切り分けられています。小原委員がおっしゃったように、専門家強化っていうのは大変いいことだと思いますし、それでより活性化すると思いますので、学芸員が片手間でやるっていうのは限界があると思いますので、そういったことも考えていくことが大事かなというふうに思います。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>日本では難しいような。</p>

池上 委員	はい。整備していく必要があるんじゃないかなと感じています。
岩崎 委員	<p>とはいえなかなか、そうはいかないっていう現実もあり、もう1つはやっぱり学芸員が来ている人たちと顔が見える関係になるっていうことも大事なことになるかなとも思うので、本当に切り分けてしまうことがいいかどうかっていうのは、やっぱりよくよく考えてみたほうがいいかもしれないなと私個人は美術館を運営しながら思うところではあります。本当に時間がない中、きりきりとやっている学芸員もおります。で、もう1つは、事務方と学芸で、学芸だけが事業をするのではなく、事務方もそこにしっかり加わっていくっていうような姿勢も大事なんじゃないかなと思っています。事務をする人と事業をする人っていうふうに分けてしまわないっていうような意識もきっと大事で1つの館と一緒に運営していくわけですから、そこは何か力を合わせてやって欲しいなと思います。教育普及ですけれども、教育委員会なので何となくこうこども向けの教育っていうことになりがちなのかどうかよくわかんないんですけど、生涯教育とか、社会教育、今、小原委員が社会教育士取られたっていうこともありましたけれども、生涯、教育だろうと思いますし、それこそリタイアして時間ができた方たちが学び直すとかいうことにおいて、総合博物館なので、本当に理想的な場がここにあるんだろうと思うんですよ。何かに偏っているわけではなく、自分の興味があるところに、それぞれの方々が触れ得る環境があるわけですから、そこをしっかりと受け皿として、さっきのプラネタリウムとかもそうですし、その子供に特化しなくても、大人の方、シニアの方とかっていうようなところにもしっかりと目を向けて、これから本当に超高齢化社会ですので、そういう方々の受け皿になって、そういう方々が生き生きと暮らせるというか、ここで活動されるようなことも1つの方向性なのではないかなと思います。</p>
坂本 委員	この講座とか教室を開くときには、細々とした準備がたくさんあると思うんですね。それをすべて学芸員の方がされるのはもう絶対もったいない時間だと私も思います。例えば高校とか、物化生地の各準備室があったら、それぞれに昔は実習助手がついていましたけど今は、幾つか集まっておひとりとかいう話を聞きますけど、やっぱりそういう実習助手のような方がこういう教室講座助

	<p>手みたいな形で常勤じゃなくてもパートさんでもいいのでそういう方を配置して、こういうのを準備してくださいっていうのを前もって頼んでおいて、それを特化して準備はこの人に任せとけば大丈夫っていう存在があったら、かなり効率的になるんじゃないかなと思います。1つの提案です。</p>
山本 委員	<p>生涯学習の拠点というところでお話がありましたけど、やはり私も地元の自治協議会の副会長とか、スポ協の会長とかさせていただいていますが、やはり地域にもっと周知ですね。ホームページや熊本市のラインとかでされていると思いますが、生涯学習というところで進めていかれるならですね、地域と結びつきがあまりないんじゃないかと。私は自治協議会の会議とかに出ても、博物館の案内は見たことも聞いたこともありませんし、せっかく教育市民委員会で教育委員会と文化市民局が一緒になってますので、ちゃんと連携してですね、案内していくと利用者が増えていくかもしれませんし、予算や人員の問題もありますけど、そのバランスを見ながら、老若男女関係なく、生涯学習というところで目指していかれるものは地域にもちゃんと周知していく、力を入れていくべきじゃないかと私は思います。以上です。</p>
松下会長	<p>広報の話ですかね。市政だよりなんか載ってくるんでしょうけど。回覧版にチラシを挟んだりとか。いずれにせよ予算を伴うものではあります。</p>
小畑 委員	<p>今の話とちょっと関係あるんですけど、ホームページを見せていただくと、お名前までわかるんですね。何が言いたいかという、博物館というのは、今から高齢化とか少子化が進む中で資料がどんどん失われていく時に、何が流出やなくなるものを防ぐかという学芸員の方の地域との結びつきだと思うんですね。そういう意味でも今地域と遠いっていうことは1つの課題だと思いますし、あとは例えばホームページでもですね、学芸員さんのやってる研究とかその人の人柄が見えるようなものを出して、もっと身近な方だと感じられるような広報、知っていただきたいと思うし、そこに市民との結びつきが出てくる、もちろん個人情報ですから、出せることは限定されていますけど、例えば、大学においてはこの先生どんな研究してますよ、っていうのはちゃんとそこに</p>

	<p>ページが行くようになってるんですね。そこを見てくる学生さんとかもいらっしゃると思いますので、1つの例ですけど、ホームページの中に、学芸員の顔が見えるような、やってる活動が見えるような、何か物を作っていただきたいというのをご提案します。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>という提案が出ましたが何か。これはどうなんですか。顔が見えるというのは本当に顔が見えろと。</p>
<p>小畑 委員</p>	<p>見えてもいいと思います。顔がなくても、こんな活動していますし、こんな資料集めてますよとか、なんかそういう形でもう少しちょっとフランクに活動の内容とか、どういう学芸員がいるか、必要だと思うんですよ。ぜひ工夫していただきたい。</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>年に数回ですけれども後で情報公開のところでも出てきますが、ニュースレターといった形で各学芸員の活動は出しておりますが、今のご反応のようにまだ届いていないというのが現状だと受けとめました。今後の課題として、その解決に向けて考えていきたいと思います。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>引き続いて、4番目が教育普及活動なんですけど、こっちは外に開かれたものかと思います。別立てしてありますので、これについてもご意見があったかと思います。博物館ネットワークセンターの山瀬所長、外との連携みたいなものでは何かいろいろお考えを持っておられることかと思います。</p>
<p>山瀬 委員</p>	<p>私どもも以前からいろんな収蔵資料の標本とか、それともっと解説をしたパネルとかをキットにしていろんな教育事務所単位でまわしてもらっている、学校現場で使ってもらいたいことやっていたんですけど。やっぱりこの近年でいわゆるデジタルアーカイブ、いわゆる館側はもうどんどん収蔵資料のデジタル化を進めていこうというのをやっていて、且つ学校現場の方でも、子供さんたちが1人1台、タブレットを持っているというような状態で、かつ、学校で探究的活動っていうんですかね、何かいわゆる自分で問いを立てて自分で調べていくような、そういった活動っていうのを、学校現場で求められているということであれば、博物館に限らず、美術館とか図書館とかでもそんなのかも</p>

	<p>しれませんけど、そういった収蔵資料をですね、デジタル化して、かつ学校現場のニーズに合うような形で教材化していくというような取り組みというのが、実際できればと思って実際そういった取り組みをしているところもあると聞いておりますので、ぜひそういったこともちょっとご検討いただければいいんじゃないかなと思います。</p>
松下 会長	<p>山瀬委員のところでもそういうのもされているわけですか。外との連携。</p>
山瀬 委員	<p>やりたいとは思っているんですけど。</p>
松下 会長	<p>学校現場ではいかがですか菊川委員。</p>
菊川 委員	<p>探究活動も取り組もうとしていますが、個人的に思うのは、探究活動の土台となる知識や基礎基本をおろそかにしてはいけないということ。その土台と探究活動も両方大切にしながら実践していきたいと思っています。</p>
松下 会長	<p>現状としてはどうなんですか。</p>
坂本 委員	<p>私小学校の免許持ってないんですけど、総合的な学習の探究の指導をして欲しいってことで、1年間35時間、行って教えているんですよ、もうすごく大変です。子供たちそれぞれの希望を書かせてそれに沿った研究を1年間させていく。小学校ですけど。その研究成果を最後の発表会で、パワポで発表させるんですけど、本当に自分が持っている素材を全部利用して、かつ自分が空いている時間に下準備に行って、野外から持って行って指導していくというのがあったりですね、教員の方はとてもできないと思う。なので、やはりそういうときに、博物館の存在は非常に大切だと思います。そこで、自分がわからなくても聞ける学芸員の方がいらっちゃって、かつ、貸し出してもいいものを、時間なかなか難しいと思うんですけど、そういうのを集めていただいてこの授業のときにこれを使っていいキットみたいな形であるならば、それは喜ばれるものだと思います。</p>

松下 会長	<p>どうですか博物館側から。講師派遣事業とか。お出かけ事業ゲストティーチャー、いろいろありますけどこれはオファーが来るんですか、学校。それともこっちから。</p>
松下 主査	<p>そうです、学校の方からですね、理科のこの單元について、学校で十分な材料というか、資料がないというようなことで問い合わせがございまして、分野はいろいろですけれども小学校が多いですけれどもですね、こちらから資料を持っていきまして、45分から50分くらいの授業をお手伝いするというふうな格好です。年間これぐらいの数の学校には、実際に行っております。</p>
中西 委員	<p>すみません。今おっしゃった学校に行って、支援というか、お手伝いしますっていうのはこの館内学習支援プログラム集というのをもとにされるのですか。</p>
松下 主査	<p>はい。今申し上げましたのは、お出かけ事業のプログラム集、2冊ございまして、うちに来ていただくのが、館内学習のプログラム集で、派遣事業の方のプログラム集がもう1冊別冊になっているのを、各学校に置いてもらっています。ホームページにも同じ、画面がございましてそこから、一応問い合わせがあったときに、この2冊があります。ホームページを見ることができますので一応内容を見ていただいてどの部分の授業が必要かを言ってくださいみたいにして、向こうに逆にお尋ねして、大体この内容でお願いしますと、いうふうな流れになることが多いですね</p>
中西 委員	<p>簡単にイメージしていただくためにこれが役立つっていうことなんですか。</p>
松下 主査	<p>はい。そうですね。</p>
中西 委員	<p>それと2番の館外学習支援プログラム集と4番の館内学習プログラム集は同じものですか。</p>
松下 主査	<p>同じです。学校の先生方に学校に配布してもらっている館内学習プログラム集についての、具体的なご説明を差し上げるのが、夏の先生方への研修として位置付けています。配置はしていますけ</p>

	<p>ども存在もご存じない先生も、学校とかもあつたりして、こんなことやってる、やれるんですよってということをお伝えするようなものを研修としてやっています。</p>
<p>中西 委員</p>	<p>素材としてとてもいいものがたくさんあるように思うんですけども、思いのほか知られてないものも多いんじゃないかなと常々、博物館に関しては思うんですね。展覧会もそうですけれども。これちょっと多分、先生方皆さんご存じだと思うんですが、もっともっとPRしてこんないいものがありますよっていうのをお知らせしてもいいのかなということで、全体に対してですけども、思います。ありがとうございます。これちょっと拝見したいと思います。ありがとうございます。</p>
<p>坂本 委員</p>	<p>このお迎え事業は、県内の小学校の名前が挙がっていたので、いいんだろうと思うんです。ゲストティーチャー派遣事業は市内の学校限定になるんでしょうか。</p>
<p>松下 主査</p>	<p>はい、そのようにお答えしているところです。遠くなりますとなかなか調整も難しいですんで、とか。</p>
<p>坂本 委員</p>	<p>ズームもダメなのですかね。私も毎年植物がとても困っていて、それで山口学芸員とかがちょっと2時間でお話してくださるといいなとこれを見ながら思ったものですから。市内ですね。</p>
<p>高宮 委員</p>	<p>ひとついいですか。熊本大学で随分お手伝いしていただいて助かっているんですけども、学芸員の人たちのために何年かに1回自由な研修ができるような制度がつくれないんでしょうか。前、博物館の学芸員の人を社会人入学で大学院の指導したことがあるんですけど、随分そのときにやったことが活かせるようなことになって質の向上に役立ったと思うんですよね。だけど大学院に行くっていうのは結構大変だから、大学の研究生みたいな制度があるんで、そういうところに例えば5年に1回ぐらいは希望すれば、少し時間を取ってもらえるっていうような制度があると、質の向上には随分役に立つんじゃないかと思うんですよね。前の事業もそうですけど、かなり目いっぱい仕事されていますから、そういうことを館として、市として、作ってあげないとなかなか</p>

	<p>これ以上活動しろ、研究しろって言っても難しいんじゃないかと思うんですよ。だから、そういう制度ができたらいんじゃないかなって思いますけれども。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>国内留学じゃないけど何かそういう。それだけの余裕があるのかどうかということで。なんか特に回答ございますか、事務局から。</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>ご提案ありがとうございます。そのような制度があればとてもいいなと思いますし、質も当然上がると思います。教育委員会という組織の中での正職員ですので、定員管理の問題もありますし、あとは館の体制の問題等もありますので、そういった余裕ができたらとてもいいなと思って今聞いておりました。どうもありがとうございます。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>それでは、最後5番の情報公開。先ほどから出ていますようにPR活用も含めてでしょうか。広報活動も含めての博物館の姿勢、方針について、何かご意見があればということです。いろいろ出てきておりますが、デジタルを使ったSNSとか、何かそういう形での情報公開をもっとというようなことですね。</p>
<p>岩崎 委員</p>	<p>私も最初SNSとか、こういう話を思っていたんですが、今皆さんのお話を聞きながら改めて思ったんですけど、この博物館がじゃあ何のためにあるのかっていうのを、ちゃんと考えた発信をしたほうがいいんだろうなっていうふうに思いながら聞いていました。美術館もそうなんですけど、さっき池上委員がおっしゃったようなアウトプットの部分が見られるわけです。でも今お話を聞いていると教育普及の部分で学校とかそういうところを支えられている部分がすごく実は重要な博物館の仕事であるっていうふうに皆さんが思われているわけですから、今ホームページも見せていただくと、やっぱりイベント、展覧会とかいうようなアウトプット部分が前面に出ていくっていう、うちもそういうホームページのつくりになっていますけれども、それ一体何のためにしているのか。そのもとに何があって、それは一体市民の皆さんの豊かな生涯を支えるといいますか、そのもとにある、脈々と続く自然とかっていうようなものに対する思いがあるわけなので、何かもうちょっとこう作り方っていうか、アウトプットの仕方を</p>

	<p>変えちゃうっていうようなことも1つの方法かもしれないけど、小畑委員が言われたようにその人柄と何やっているかをもっとはっきり見せるっていうのもその1つだと思って、今お名前は確かに出ているんですけど、何をどういうことをされて、どういうお人柄っていうところまでは見えないんですけど、その思いみたいなものがしっかり見えるような形をまず作ってしまうっていう。うちの中でも今話をしているんですけど、日本で最初に博物館ができて130年ぐらい経っていて、みんなが見世物を喜ぶっていうところからも変わってきていると思いますし、これからそれこそデジタルみたいなことがすごく言われている中で、博物館とか美術館とかが果たす役割って何なのっていうところを、ちゃんと考えたうえでアウトプットしないと。結局は、今のアウトプットの仕方だったら人数でしかはかれないような、そこを評価してくれて言っているようなことを自らやっているっていうことだと思って。じゃあ、中身が大事であれば、ちょっと何か違うやり方に思い切って変えてしまうっていうことも、1つの方法かもしれないですし、山本委員が言われたような地域と繋がるっていうことを、もっと前面に出した形の広報の仕方もあると思いますので、何かそういう根本のことを1回ちゃんと話す時間を持つっていうのも大事なんじゃないかなというふうには思います。</p>
松下 会長	<p>確かに。ただ発信すればいいというものではないということ。</p>
岩崎 委員	<p>自分の反省も含めて。</p>
的場 館長	<p>そこで運営方針の見直しをぜひこの協議会にかけてですね、ぜひご議論いただきたいというふうな考えでございます。よろしくお願いしたいと思います。</p>
星牟禮 委員	<p>はい。私からは高校生の若い世代に、もっと博物館の魅力を伝える方法について私のアイデアを1つお話させていただきます。私はこのたびこのような機会をいただき、博物館に実際に友達と一緒に訪れたり、博物館について様々なことを調べていく中で、熊本博物館の魅力について数多く知ることができました。今後も何度も訪れたいと思うような企画とかが多くて、そこで各校の地域活性化を目的としている委員会や部活動などのグループに熊本博</p>

	<p>博物館について探究する、先ほどありました探究するっていうことを投げかけて、生徒自ら熊本博物館について知る、知って発信するっていう機会を作ることができれば、自ら学んで訪れる来館者が増えるのではないかなと思いました。以上です。</p>
松下 会長	<p>魅力的なのは、どこが魅力的だと思いますか。</p>
星牟禮 委員	<p>私自身、文系なんですけど。生物とかが大好きなので、様々な剥製とか資料を見ることができて、教育できたなと思ったのと、今実際に調べてみるまで講座とかがあることを知らなくて、そういう情報を知ることができ、今後も行きたいなと思いました。</p>
松下 会長	<p>市民の人もあんまり知らないと思います。博物館というとやっぱり展示で何か見に来るとかですね。中で何があるのかというのは多分あんまり知られていない。私は勸業館時代から知っていますので、古色蒼然とした薄暗い中にあった博物館時代を知っていますので、それがここまできたという、学芸員の数も少ないとはいえ以前に比べて随分増えたし、ジャンルも増えたし、というようなことは感じてはおります。それをどんなかこれから生かしていければなというのがあります。</p>
池上 委員	<p>関連してなんですけど、今、学芸員の方で近隣の高校とか中学校とかの科学部とかそういった部活動の研究活動に関与したり、或いはサポートされている先生っていらっしゃいますか。</p>
濱洲 副館長	<p>います。</p>
池上 委員	<p>何かそういったのがもしあれば、さっきの教育活動には出てきてないですけど、しっかり評価していただいて、館の中でもそういった活動が保障されるように取り組んでいくのがいいことかなと思います。連携を考えてですね。</p>
松下 会長	<p>何か館側から、何かございませんか。情報公開について。</p>
濱洲 副館長	<p>先ほどデジタル化の波が社会で押し寄せてっていう話を私もしました。国の研修を聞いてみますとこの博物館の世界では大きく</p>

	<p>2つあって、やはり資料をきちんと保存するという観点ですね。引き合い出されたのは東日本大震災みたいなものがありますと、もう物自体が全部なくなってしまう。ですので、それをきちんと記録するという側面、もう1つは今、社会がこういったネットでいろんな情報を得ますし、情報発信しますので、どういう形でこの私達のよさを発信していくのかと。博物館ですので、基本的には現物を見ていただくことが必要ではないかと思っていますので、やっぱり発見していただくための手段の1つ。やっぱり感動していただくのはここに来てからだと思いますけれども、その手段の1つじゃないかということを入念に入れて進めていくのかなと思います。ただ、デジタル一辺倒ではなく、先ほど山本委員もおっしゃいました通り、地域の方、回覧版ベースで見ような方、やっぱりそこも同時並行で頭に入れておかなくちゃいけないわけですね。ですので、こういった形がこういう情報公開、広報、そして最終的な目的はどこに目的をおくか、となったときには当館に足を運んでいただければというところに繋がるのかということ意識してやるのかなと。このように考えています。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>一応これで5項目見てきました。最後に評価をA B C Dで出さなきゃいけない。なかなか評価を出しにくい部分があるかと思えます。館側として評価がありますので、これどうでしょうね。</p>
<p>小畑 委員</p>	<p>よろしいですか。皆さんお感じだと思いますけど先ほどから出ているように評価についての目標というものがあって、これが、一番大事になってくると思うんですけど、これがこのBという評価されるのは、なかなか日本人らしい謙虚な、本当はAとしたいんだけどという面もあるとは思って、全部Bというのはちょっと思ったんですけど、ただ目標として、もし数値をですね利用された人数とか観覧者の数、見られた方の来館者の数であるならば、それをもう一度見直していただきたいと。それは先ほどから皆さんおっしゃっておられますけれども、そういう意味でこういう催し事はすべてにおいて、やっぱりアンケート取られてるんでしょうかね。つまり満足度をやっぱり図るエビデンスは必要ですし、これ多分ほとんどの方はよかったと書かれるので、この面をやっぱりしっかり評価すべきだと思うんですね。そういう意味で1つのお願いでもありますけど、すべての行事についてアンケート</p>

	<p>をとっていただきたいということですね。それから、もし今の場面で私たちがどうつけるかということ想定すると、このBの中にやはり目標以上に実施できたというのを書いてあって、目標という数値があると考えていいんですか。そうであれば私はもう、こんだけ頑張られたこんなAでいいんじゃないかなと思うのもたくさんありますけど。どうなんでしょう。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>これ初めてですよねA B C D評価は。 その意味あたりも含めて説明を。</p>
<p>濱洲 副館長</p>	<p>例えばこの15ページでいきますと、一番上のBっていうのはなかったんですね。これまでは、それぞれの担当者が評価を書いただけにとどまっていた、皆様方からご意見をいただいてこの場は終わりという協議会にしておりましたところを、少しですけれども、前進するような形で改めたつもりではあります。しかしながら小畑委員のご指摘にもあります通り、やはり項目ごとにおいても、その拠り所となる成果指標がないと、単に目標人数が何人とかいうことだけでも当然ありませんので、これだけ多岐にわたる事業ですので、それぞれに目標を設定していく必要があるのではないかと。そのために、まずは市場調査、これが大事なかなと思っていますので、目標の設定にあたっては私たちが決めるのではなく、そういった幅広く意見を聞き、そしてこの協議会でもお諮りしながら、このような目標設定をしていきたいというようなことも併せて、取り付けていくのかなというふうに思っています。もう1つ、先ほど、委員がおっしゃいました目標以上に達成できたっていうのは、一応個別個別には当然目標を持ってやるわけです。ですが、ある小項目、中項目、大項目というふうに体系的には持っておりませんので、こういった状態にとどまっているというところで、これをお願いするところはちょっと心苦しいところありますけれども、現段階でご評価いただければと思っています。今後改めていくということで、まずはアンケートといえますか、市場調査をもとに施策ごとのですね。</p>
<p>小畑 委員</p>	<p>そうですね、どういうことをして欲しいかというアンケートではなく事業ごとに満足しましたかとか、何が不足してますかとか、次は何をして欲しいですか、というような、そういう意味でアン</p>

	<p>ケートと言いました。そこでの満足度っていうのは、やっぱり評価の一番重要な部分になると私は考えておりますし、皆さんもそうだと思いますので、ぜひ今後はすべてのやられる事業について参加者の皆様のこの満足度に対するアンケートっていうとか要望についてのアンケートをしていただければと思います。</p>
濱洲 副館長	<p>ごく一部でありますけれども、アンケートを実施しておりますが、統一的に館として、一本通ったアンケート手法というのを持っておりませんので、そこは整理していきたいと思っています。</p>
的場 館長	<p>繰り返しになりますけど資料3の方にですね、資料3の2ページの方に、評価のあり方についてということでもまとめさせていただいた、まさに小畑委員のおっしゃってるようなところで、これを我々はやはり課題であるということ認識しております。</p>
小畑 委員	<p>わかりました。</p>
的場 館長	<p>ご意見ありがとうございます。</p>
松下 会長	<p>この評価はどう取り扱うのですか。</p>
濱洲 副館長	<p>公開をさせていただきます。</p>
松下 会長	<p>例えば予算獲得のときに、後押ししてくれるような評価になっていくのでしょうか？</p>
濱洲 副館長	<p>予算に直結するかどうかわかりませんが、ご意見の1つではあります。</p>
小畑 委員	<p>これは例えばプラネタリウムに人がいないといって私たちがCとかDとか付ければ、上の方は意識して、もっとちゃんと。そういうマイナス点が効果があるとかいうことはないんですか。まあ、募集されているというお話なんで、そういうことはないか。</p>
松下 会長	<p>いや、これだとあんまりはAは良くないのかなと思う。もう満足してしまって、うまくいってるという結論になる。</p>

小畑 委員	ただ、学芸員の方が頑張られているというのは評価したいと思うんです。
松下 会長	これ多数決で決めるような問題ではないし、なかなか難しいなど思いながら考えておりました。皆さんよく頑張ってるけど、足りないものもあるというところで、いまのところはBしかないなどという感じはするのですが、高宮委員なんかごぎいせんか。
高宮 委員	そうですね、全部Bって必要もない気はするんだけど、随分活動としては活発にやっておられて、本当精一杯やっておられるような気がするから、そういう面を見てもいいんじゃないかと思うんですけどね。
鈴木 副会長	すいません、評価をつける方は、これは初めてでもありますし、難しいと思うんですけど、今日の議論もですね、今後の熊本博物館として、成果指標をどう作っていくかの議論がこれから必要であるということは当然共通の認識として、どう作っていくかってことはこれからの課題だと思うんですけども。やはり、これだけ博物館全体としていろんな活動されていて、その全体的な評価結果を見るときに、個人的に全部B評価っていうのはちょっと違和感を持ちまして、博物館ってやっぱり一般の方は、物を見に来るのが最終ゴールではあるんですけど、教育普及活動にこれだけ力を入れられているっていうことは、項目の3とか4とかですね、他の館内講座ですとか、特にその4の博学連携ですね、指標はまだないですけど、次回どうするかを考えるということで、こういうところに博物館の力を入れてるんですよとアピールのためにもA評価でいかがかと思えます。
松下 会長	4番はAで。同じ教育普及では3番もありますけど。
坂本 委員	この委員の総合評価の判定の後ろの空白のところに文章も入るんですよ。ただこれは評価できたけれど例えばプラネタリウムの人員配置がまだ足りないみたいなことで書いて、例えばプラネタリウムのところにCがついて、課題が残ったっていう形で、評価はとていいけれど、課題がある点でという、そういう形もと

<p>濱洲 副館長</p>	<p>れると考えてよろしいでしょうか。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>はい。概ねその通りです。ここでの議論を私の方で文章化してそして、会長副会長を中心に皆さんに見ていただいたもので、公表すると、このような運用を考えています。</p>
<p>岩崎 委員</p>	<p>結構責任重大です。</p>
<p>小畑 委員</p>	<p>なんか教育普及もこういうことをすごく頑張ってらっしゃるなんて思うけど、学芸員さんから見ると、すごい自転車操業で大変な思いをされているだろうと思うので。Aでちゃんと頑張ろうってなると、もう本当に首がキュッてなると思うので、そういうところもその文章の中にちゃんと載るとか、何かこうしておかないとそこだけを見る人たちにとっては、危険なものになりかねないかなあというふうに。</p>
<p>中西 委員</p>	<p>とにかく頑張っている点は評価できる。ただやっぱその運営的にやっぱり問題があるので、非常にタイトになっている。そこはやっぱり改善して欲しいみたいな書き方で B にするとか。そこはもう、委員長と副委員長にご一任してもいいんじゃないですか、それと事務局の方と相談していただいて、ここに良い評価をつけたときにどうなるかっていうのを想定した、今、委員がおっしゃったように、僕はすごく大事だと思うんです。皆さんは頑張ってるっていうのも委員の皆さんの意見ですけれども。組織的にやっぱりここ予算を少しつけるべきであるとかそういうところが足りないっていう、外部的に聞いた意見っていうのでちょっと辛めにつけておくと、次の予算要求とかそういうときにやっぱり役に立つものになるので、書き方をぜひお願いしたい。</p>
<p>中西 委員</p>	<p>私はこの意見求められたときに、この館の評価に対して意見を求められたんだと思って、それぞれBでいいと思いますっていうのを書いちゃったんですけれども、そのレベルが違うことに対してB、こう含まれている内容が多くてですね、評価するのが難しいなとこの点はものすごくいいけれども、でも、ここに関してはここが手薄ですっていうような、すべてがそれだったなというような気がしていて、本当に皆さんおっしゃる通り、学芸員がものす</p>

	<p>ごく頑張られているのはわかりますし、この人員でこの内容を動かしていくって本当大変だろうなと思います。奮闘されているのもすごく評価できると思うんです。その点は本当に全体に関して評価できると思います。それぞれに関してちょっと足りないところがあるのでなんかB評価になっているっていうような感じがするので、この評価をもうちょっと難しいなとすごく思います。もう、言うならBしかないのかなっていう形で。</p>
松下 会長	<p>そうですね、中西委員はBに</p>
中西 委員	<p>すいません、全部賛成してしまったんですが、そこは大変難しいなと思ったところで、何か適正に評価できるといいのになって思いました。</p>
松下 会長	<p>今までに今日出た意見をちょっと文章体にされて、ちょっと書いていただいてこちらで、決めていくと。</p>
鈴木 副会長	<p>すいませんこれABCと必須なんですよ、各項目の評価が。全部の項目に。</p>
松下 会長	<p>必ず。</p>
鈴木 副会長	<p>そうですね。</p>
濱洲 副館長	<p>お願いしたいです。</p>
池上 委員	<p>1から5までの各項目についての評価とそれへのコメントということですが、先ほど運営面の話とかここに出てこない研究や収集があると思うんですけどそういった、総括・総評みたいなことを協議会として出されること、付け加えることが必要じゃないでしょうか。この項目以外に、全部総括したコメントを提言として出す。</p>
松下 会長	<p>総括。はい、考えます。この数なので皆さんに結果をね、事前に渡して、これまかりならんとか、ないと思いますが、それとこのスタッフとか学芸の方々本当に一生懸命されているので、別に、</p>

	<p>一筆書くか、これの評価をそれなりに書くか、そこは何かしないといけないかなとは思っております。このA B C Dだけでもここで決められませんかね。そういう、できたら決めて欲しいという、要望がありますが。それとも、もう1回メールで回収しますか。それがいいんでしょうか。</p>
濱洲 副館長	<p>ここで決めにくいということであれば、書面などでも良いのかなと思います。</p>
松下 会長	<p>そうですね。これは急ぐんですか。</p>
濱洲 副館長	<p>いえ、必要な時間は、はい。</p>
松下 会長	<p>いいですか？館長。そういうことで。</p>
的場 館長	<p>はい。今空欄になってるA B C Dの欄と、右側に、いわゆる総括するような欄がございますので、そこを、会長副会長と、あとは、今回、いただいた皆さんのご意見を踏まえたものを、そこに落としこむような形で策定をしまして、後日皆さんに改めて書面で見ていただくと。そうした流れでいかがでしょうか。</p>
松下 会長	<p>はい。結構中身としては、いろいろな意見が出て充実して、皆さんお1人ずつ発言もあってよかったかなと思いますので、評価と一言ふたこと、また理由をもう1回、事務局に寄せると。それを事務局でまとめていただくと。その時は、A B C Dはもう、若干多数決になり気味かなとは思いますが。そういう形でまとめたいと思います。よろしいでしょうか。</p>
委員	<p>はい。</p>
松下 会長	<p>岩崎さんいいですか。</p>
岩崎 委員	<p>はい。</p>
松下 会長	<p>ではそういうことではい。私はここまででしょうか。はいどうぞ。</p>

小畑 委員	はい。時間取らせてすいません。
松下 会長	いえいえ、どうぞ。
小畑 委員	資料 2 の 4 ページの、基本理念というのはもう変えられないんですか。
的場 館長	これを今後検討していくということでございます。
小畑 委員	いいんですか。そのポイントとして、いまグローバル化の中で市民目線、教育委員会の組織だということで、そこは意識されていると思うんですけども。今から、DX に合わせたようなものを整備していかないといけないし、情報発信をみたときにやっぱり世界に発信していくような、そういう語り口をしていくべきだと思うので、検討されるということであれば、意見として、市民に限定しているところは、文言を変える必要があるんじゃないかという意見です。
的場 館長	小畑委員、ありがとうございます。今おっしゃったのが別冊でお配りしております、平成 30 年にできた、熊本博物館リニューアル後の運営方針というものでございます。この中から抜粋したページでございます。皆様にご検討を、ご議論いただく、ご審議いただくのが、このリニューアル後の運用方針そのものでございます。どうかご安心いただければと思います。
小畑 委員	基本理念の 4 つを減らしたりふやしたり解体したりっていうのが可能という。
的場 館長	はい。
小畑 委員	すごい大変ですよ。やるべき機能論から積み上げていけばいいんですけども。わかりました、ありがとうございます。組み込まれたことはちゃんとやるという予算的な担保も、いまから行政的に進めていくという姿勢はある。
的場 館長	頑張っていくということですね。

小畑 委員	ここに願いを込めると。ありがとうございます。
松下 会長	結構大変ですけど、その運用方針をもう大分経ってますけど、これに基づいて何かまた、これは変えたほうがよかろうとかいうようなことも、事務局側は考えておられるんですか。
的場 館長	この運営方針自体を、法律も変わってきましたし、デジタル化ですとかいろいろ社会状況も変わっておりますので、それを踏まえて、変えなくていい点も多々あるかとは思いますが、この運営方針、これからどういう博物館にしていくんだというような目線です。我々も一生懸命作業していきたいと思っておりますので、本当にこの場で自由闊達なご意見を頂戴しながら新しい運営方針を、今後熊本博物館がどうしていくんだっていうようなものをですね、定めていければなとは思っております。
松下 会長	今聞いた範囲では、がらりと変わる、変える意思がおありのような感じもしましたけど。
的場館長	いいえ。そのために、まず大前提となるのが、やっぱり現状と課題をどう分析するのかっていうところでございます。この博物館が今どういう現状で、どういう課題を抱えていて、そこを乗り越えていく、もしくはその解決していく、そういったものがまずベースにあってそこからこっちの道をいこう、具体的にはこうしていこうというような、大きな理念だとか方針だとか、最近はロジックモデルなんかと言いますがそれもそれを解決するためにどういう事業を組み立てていこうか。そういったものかなというふうにはイメージしております。平成 30 年にできたリニューアル後の運営方針というものは割とページ数が多いでございます。私の中では、もうちょっとこう、A3 の 1 枚ものでパッと一目瞭然で目視できるような、そういったものでも、構わないのかなとは思っております。当然そのためにはいろんな考え方の整理ですとか、現状と課題の整理だとかもそれがベースになってくると思いますが、けれども。わかりやすく、皆さんが見てですね、それから市民の皆様、県民の皆さんが見て、熊本博物館ってこっちの方向を目指して今後行くんだというようなものが、わかりやすいものができ

	<p>ればいいのかなと。そのためには皆様のご意見、市内部だったり、いろいろの中で議論していただくものを積極的に取り入れていかなければならないのかなとは思っております。また、博物館協議会という場がそういう場でございますので、ぜひ今後ともよろしくお願ひしたいと思っております。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>はい。ここまででいいんですかね私は。何か評価については、ちょっと先送りみたいな形になって、私の力及ばずではありますけれども。</p>
<p>的場 館長</p>	<p>別途事務作業をさせていただきます。</p>
<p>松下 会長</p>	<p>追って決められたらと思っております。では、私はここまでありがとうございました。もう、何か別のご意見ありませんね。</p>
<p>的場 館長</p>	<p>では、松下会長をはじめ、各委員の皆様には長時間にわたってご審議いただき誠にありがとうございました。以上をもちまして、令和7年度の第1回熊本博物館協議会を閉会としていただきます。どうもありがとうございました。</p>